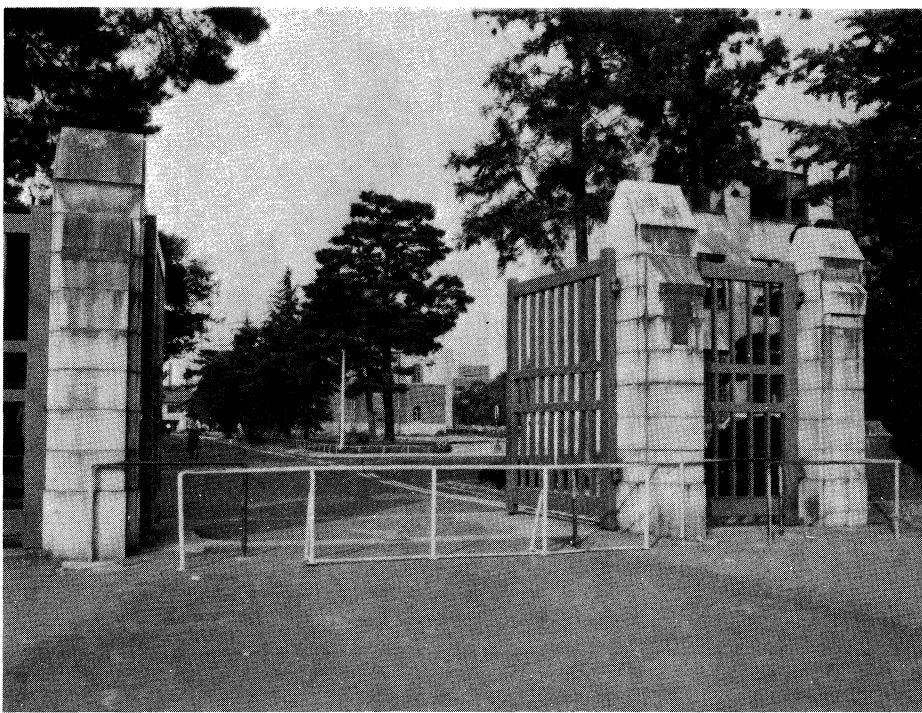


東北大学法学部同窓会

# 會報

第 10 号  
 発行所  
 東北大学法学部同窓会  
 発行日  
 昭和58年7月10日  
 印刷所  
 (株)今野印刷所



東北大学(片平)正門より構内を望む  
 —法学部旧研究棟はすでに取り壊されている—

## 川内だより

会長 広中 俊雄

昨年より少し早めですが、ことしも川内からのたよりを同窓会の皆さんにお届けする時期となりました。

法学部が、ここ川内の青葉城二の丸跡に移ってきてから、この八月で十年になります。昨年の東北新幹線開通で仙台も変わってきたらうと、遠くにお住まいの方々は学生時代をすごした町のたまたまに大都会の賑いを重ねながら仙台を想われることでしょうか。たしかに仙台は変化してきています。しかし、変化が一樣に訪れているわけではありません。法学部の研究棟から眺める東方の市街地には高層建築物が林立するようになり、北方にも市街化の進行が感じられますが、西から南へと続く濃淡さまざまな緑は、この十年間、変わることもなく私たちの目をなごませてくれています。もちろん、私たちのキャンパスにも環境悪化の危険はあります。最大の問題は、近くの道路にまで及んでいる自動車の交通量の急増傾向でしょう。雑が道路を横切る姿などもよく見かけられた十年前の状態を回復することはむずかしいにせよ、自動車による人身事故すらおこっている現状はなんとかしなければなりません。私たちは、他の学部の人たちとともに昨年来この問題に取り組んでいますが、今後とも研究・教育環境の保全には最大限の努力をするつもりです。

研究・教育の環境に関するものはこれくらいにして、もう一つ、研究・教育の態勢に関することを書いておきましょう。  
 私たちは、昨年、法学部の研究・教育組織に関する将来構想をまとめました。昭和二十四年四月に法文学部法科の発展として独立した法学部には、当時、十六の講座が設けられましたが、今日では、その数が二十五になっています。分野別に書いてみますと、私法学の分野では民法第一、民法第二、民法第三、商法第一、商法第二、社会法、民事訴訟法、破産法・強制執行法、国際私法の九講座、公法学の分野では憲法、比較外国憲法、行政法第一、行政法第二、刑法、刑事訴訟法、刑事学、国際法の八講座、基礎法学の分野では英米法、法理学、日本法制史、西洋法制史の四講座、政治学、政治学、政治学、政治学、国際政治学、比較政治制度論の四講座です。しかし、これではまだじゅうぶんではありません。むろん学部には適正規模というものがあ、り、むやみに大きくすることは避ける必要があります。慎重に検討したうえで、経済法、政治史、法社会学、比較法、ローマ法、行政学の六講座の増設および併せて附属施設としての法政資料館の新設を国に要求するという計画を私たちは決定しました。昨今の財政事情からして要求全部の実現に長期間を要することは覚悟せざるをえませんが、私たちの研究・教育活動への情熱を示すものの一つとしておしらせする次第です。

# 雑談的回顧

東北大学名誉教授 高柳真三



原稿も集まり、とりまとめて岩波の係りの店員へ送ったが、やがて校正刷が出て編集代表の私宛に届けられてきた。

ところがその時のことでいまでもハッキリ記憶に残っているのは、それが研究室の私宛に速達便で配達されたのが、すでに夜に入ってからであり、もちろん私の帰宅後のことであった。

この会報の前号に、田岡良一教授の「法学」刊行にまつわる話ののっているが、それについては、私にも忘れ難い思い出がある。「法学」の創刊号が出たのは昭和七年一月のこと、それまで当時の法学部では法文経を通じ、どの科も機関誌をもっていなかった。しかし、いずれの科も、教授陣の顔振れが揃ってくるにしたがい、雑誌をつくる議が動き出したが、とくに要望の強かった法科が他に先んじて、それを実現したのである。

実際の準備は前年の春頃からよりよりはじめられ、岩波書店へ顔の利く二三の教授が出かけて、出版に関する基本的契約をすませきたあと、編集の実務は、伊沢孝平、橋本文雄に私を加えた当時の若手三助教が担当することになった。十一月になると執筆割宛の

宛に速達便で配達されたのが、すでに夜に入ってからであり、もちろん私の帰宅後のことであった。当時は速達便ができて日も浅く、そんな夜間扱いしたものらしい。とにかくそれを受けとった宿直の用務員は、至急電報を受けとったかのように考えたらしく、すぐに寒風の中を自転車を走らせ、すでに九時を過ぎて戸締りをした門前へつくと、声を大きくしてわが家の名をよんで開けさせ、封筒を手渡して帰って行ったのである。校正事務はその後支障なく片付いて、翌昭和七年一月、予定通り「法学」創刊号を手にする喜びを、関係者一同分ちあったのであった。

ところが私の研究室生活にとって昭和六、七年の頃は、右にのべたようなつかしい思い出をのこしたが、ひとたび眼を外界に向けると、重苦しく暗い記憶が湧きあがってくるのを、抑えることができない。すなわち昭和初年の世界大恐慌の余波は日本にもおよび、五年には金輸出解禁が実施されたが、六年になると財政難のため官吏俸給令が改正され、約一割の減俸という何とも手痛い処置が、われわれに対し強行されたのである。この年の九月には上海事変が相ついで起り、さらに五・一五事件が勃発して、大養首相射殺の狂暴事件の発生を見るにいたったのである。大戦前夜を想わせる暗澹とした気配が、立ちこめはじめていることは、誰しもが感じにちがいがなかった。

世間一般にひろがってきた就職難の波は、大学卒業生をも例外扱いにしなかった。上位の学業成績をとっていないと、志望の就職口への採用合格は困難を免れず、下位の成績では、浪人生活を送るのもやむをえないと見られていた。それゆえい試験成績をとることに切実な意味があったから、教室での学生の出席率は高く、学習態度にも熱がこもっていて、私などは何か迫力を感じさせられた覚えがある。

社会的不況を反映して、たとえば就職しても会社方面では、地位や収入が不安定を免れず、それよりも裁判官になるほうが、生活が安定し収入もわるくないという考えが、次第に強くなってきて、司法試験をうける準備のための勉強をする学生が多くなってきた。かれらの中には、人を感嘆させるような熱意を示した、勉強の努力家もいたらしい。そのため試験の成績に効果があらわれ、法科の卒業生および在学者の合格者の数は、著しい増加を示すにいたった。

しかし一般の就職競争にも、また司法試験をうけるためにも、法学部の法科や経済科では、それぞれ専門学科外の講義もきいて、知見をひろめる自由が認められていたので、結果的には専門科目の勉強が手薄であると評価される不利をさげられなかった。これに対応するための論議がくり返され、やむをえぬ措置として、昭和八年に学習規則の大変更が行われ、法科的科目の必修化が著しく増加することになった。この変更がはたしてどのような効果をもたらしたか、測定してみるだけの資料はないが、とにかくこの時期から法学部の法科は、既成の大学の法学部と内容的にはほとんど同じものになったのである。

この昭和八年は、京都大学法学部の滝川幸辰教授の著書「刑法読本」が、文部当局の忌諱にふれたことに端を発して、同教授が休職となったいわゆる「滝川事件」の勃発した年で、東北大学もその影響をうけ、京大支持・学園の自由確保をよびかけて、学生の抗争運動が行われたが、たしかこれが私が東北大学で経験したはじめての

# その頃の大学

元小樽商科大学長

實方正雄

私が仙台の東北大学にいたのは、約半世紀の昔、法文学部創設の時代であった。教官の数こそ少なかったが、学間に取組む態度は非常に真剣で、ひたむきに研究に熱中し、毎日研究室へ出るのが普通のことであった。仕事は研究室でと言うのが、当時の大学人の風潮で、研究室へ出ないと落付かない風だった。昼食は合同研究室へ関係教官が集まって、助手諸君と同じ食事をとるのが普通であった。食事の前後の時間は、誰からともなく今やっている仕事の話が出ることも多く、論談に花が咲き、いつも楽しい昼食会となったが、何と言っても論談の中心となるのは、若き日の中川教授であった。こうして、上下の隔てなく話し合うという気風が、研究室の中にもされ、極めて庶民的な風土であった。

その頃、東北出身者を軽視する一部教授もいた研究室で、黙々として勉強を続けて学界へ出た諸君が懐かしい。「おやじ」という愛称で一高の後輩から慕われていた故中井教授(台北大学後に関西学院

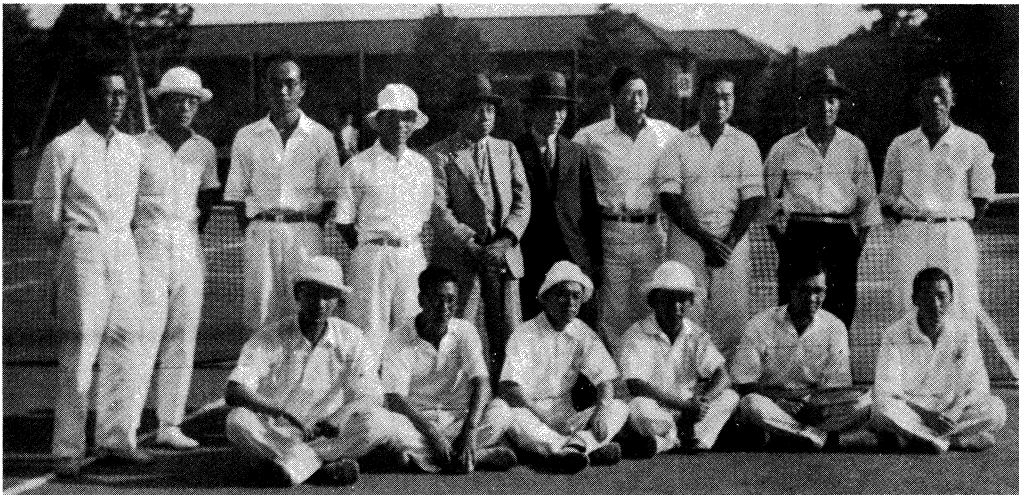
大)、東北学院大の松木教授、川崎教授、母校の斎藤教授、岩手大の関文香教授、関西学院大の故大森教授、故三戸教授、飛澤教授、大阪府知事となった黒田教授(大阪市大)、公取の委員となった有賀美知子女史などがそれである。

その頃の研究室では、毎日午後五時半過ぎる頃になるとグラウンドへ出て、テニスをやるのが日課となっていた。リーダー格は中川教授で、練習に加わったものは小町谷教授・伊澤教授・高柳教授・広浜教授それに私や助手などで、六時半頃まで練習し、時折は帰途街へ出てビールで運動の渴をいやすこともあった。テニスで忘れ難い思い出は、東大法学部との春秋二期の懇親試合で、仙台と東京とで交互に試合が行われた。ダブルスには、私は中川教授と組んで出場した。東大側は、田中耕太郎先生を主将として、宮澤俊義・横田喜三郎・田中二郎・鈴木竹雄・石井照久・江川英文・兼子一などの諸教授が加わり、我妻栄教授や川島武宜教授も応援団の常連として参加した。テニスには各人の個性

が端的に出るし、それに珍プレーも続出するので大変に面白かった。テニスを通じての交遊は、学問分野でも益するところが大きかったように思う。それにしても、記念すべき優賞杯の穂積杯は今何処に留まっているのであろうか。

在仙時代の思い出としては、法律相談所のことを忘れることが出来ない。これは、私が学生時代に中川教授が創設したもので、宮城県社会課がスポンサーだった。初め養老院の一部を借りて相談を行っていたが、後に聖公会の二階を借りて移り住んだ。先づ学生が予審を行って事実審理をなし、最後に中川教授が主審として法律的判断及び解説を加えた。中川教授は法学クリニックの重要性を説き、その巧妙な話術は学生を引き付け、その頃の学生集団としては一番大きく且つ活動的なものであった。後には、中川教授が休まると、私が入審の役割を務めるようになっていた。相談所は毎火曜日と土曜日の午後行われていたが、所員には優秀な学生が多く集まり、炫耀会という親睦団体を作った。縦つなぐを固めて行った。その頃、高等文官試験に合格する者の数は少なかったが、主として所員の中から合格者が輩出、札幌の長老弁護士斎藤忠雄氏、司法省に行った小石寿夫氏、行政管理庁長官(後に宮城県知事)になった高橋進太郎氏など、今尚記憶に残る逸材である。

東大とのテニス懇親試合(東北大テニスコート)



講義については、忘れ難い思い出がある。初めて大学の教壇へ立つ時の気持は複雑であって、三十歳前の若造のこと、多少緊張で胸をどきつかせ乍らおもむろに講義室へはいつて行った。すると一番

前列右より  
 伊澤教授  
 田中教授  
 宮澤教授  
 小町谷教授  
 中川教授  
 広浜教授  
 後列右より  
 実方教授  
 勝本教授  
 鈴木教授  
 石井教授  
 川島教授  
 我妻教授  
 横田教授  
 高柳教授  
 兼子教授  
 伊藤事務官  
 (後の文部次官)

前列に羽織袴姿で髭をたくわえた五十歳がらみの一人の紳士が座っていたが、直ちに直立不動の姿勢を取って私に丁寧な礼をした。他の学生は座ったままだったが、それにひかれて一斉に礼をした。やつの思いで講義が終り帰ろうとする、例の紳士が寄って来て、「私は予備役の海軍大佐でありませう。今まで海軍の狭い世界で暮して参りました。これから広い社会の勉強をし度いと思えます。どうぞ宜敷しく」との挨拶。少しも不自然なところはなかった。大学教師にとって講義は真剣勝負の場と心得ていた私は、更にこれに礼節を加えてという感銘を強く与えられた。その頃は、こうした類型の学生もいたのである。

学部創設時代の話として「実方事件」というのが伝えられていると聞く。半世紀も昔のこと、今更らという感じがなく、書いても、少しく事実を客観的に書いておく責任を感じる。実方事件という、いかにも私が主謀者であるかのような印象を与えるが、実はそうではない。創設時代にあり勝ちな若い教授達一部の派閥の対立が表面化した事件で、東北の卒業生で助教授の第一号となった私がそのまぎぞえを食った出来事なのである。創設時代の東北大学には国際私法の講座はなかったが、私とその要員として助教授に採用された。たまたま京大事件で京都へ転出した石田教授の民法第二講座

が空位となった。私は実質的には財産法の分野をやっていたので（金約款問題やフランス民法など）、中川教授が指導教授として、その講座への横すべりを推薦した。法学科の教授会では再三審議の結果、その提案が承認された。当時の法文学部では、各学科の人事は各学科の自主性に委せ、学部教授会は形式的な決定機関として機能していた。ところがこの学部教授会で、小町谷教授が学科の審議決定を無視し、無定見にも異議を唱え出した。事情のわからない他学科の教授達は、問題があるなら見送ることにしたら、ということになった。私はこれを聞き、若気の至り、不条理な振替に半ば憤然として他大学への転出を決意した。末川先生の推薦もあり、大阪商大河田学長も喜んで迎えよう、ということまで話が進んだ。これを伝え聞いた当時の新聞は、トップ記事として写真入りで、中川教授グループと小町谷教授グループの派閥の対立を報じた。事情を知った文科系の長老教授達は非常に心配して奔走斡旋の結果、法学科の決定通り事態が処理される運びとなり、熱心に私を慰留して下さった。私は母校の将来を思い、苦しみ悩んだことは事実である。助手諸君や学生諸君も慰留運動を起した。殊に学生三東三司君（現大東文化大教授）の夜を徹して慰留してくれた熱意は、胸にしみた。しかし、大阪商大の好意を東北大

の事情好転に利用した、という印象は避け難い。私は当初の決意を断行して、母校への情別れを押し切った。当時の私は、それが学者の節操だと信じたのである。それが、果して客観的にも正しい決断であったのだろうか。学部送別会の席上、小宮豊隆先生が「実方君、早く帰って来いよ」と言ってくれた言葉が今でも脳裏から離れないが、私の人生の歩みはその期待に添えなかつた。

## 募金による 委任経理金について

幾代 通  
(元同窓会長)

毎年の支出の使途のうち最も重要なものは、当学部の研究発表機関誌である『法学』の刊行を従来年四回から年六回に拡充し、その経費に充てていることである。つぎに、一般予算の緊縮の状況のもとで、また昨今価格の騰勢の著しい研究・教育用の和洋の学術図書を購入経費の補充に支出しています。おかげで、必要な文献の入手には、どうやら事欠くことなくやっております。

内外の優れた学者を招いて学術講演等をお願いするための経費に充てることも、この委任経理金の重要な使途の一つです。ちなみに、昭和五六年の新入学生歓迎の意味をこめた学術講演は田中二郎前最高裁判事、同じく昭和五七年のそれは川島武宜東大名誉教授、本年は山田最東大名誉教授にそれぞれお願いすることができました。また、ここ二、三年の間に十人近い外国学者を講演・セミナー等に仙台に招くこともできました。

このほか、国際学会への出席や学術的調査のための当学部教官の外国出張にさいして旅費の一部の援助をすること等にも、本委任経理金から支出をしています。

本委任経理金は、発足以来、だいたい右のような工合にこれを使用してきておりますが、とにかくこの経理金が存在することが、当学部の研究・教育活動の円滑と活性化のための支えとして実に有用に機能しているということは、現在学部籍におくわれわれの日頃痛感しているところであります。ここに一言御報告しますとともに、会員諸氏の御好意に改めてお礼を申し上げる次第であります。

## 御寄附についての御礼

昭和五年卒業の岸義一先輩が昨年十二月に亡くなられましたが、奥様からご逝去のご通知とともに同窓会に対し金二万円のご寄附がありました。故人が生前なつかしく語って居られた母校の思い出を、そのご添え書きがありまして、厚く御礼を申し上げます。同窓の皆様に御報告申し上げます。

(事務局)

# 職場だより

## 日本銀行 宮城県庁

### 第二世紀に入った

#### 日銀と青葉会

安齋 隆

昨年十月、日本銀行は創立百年を記念しました。この百年はわが国経済の歩みとともに、激動の時代でした。その歴史の重みを感じ、そして国民の励ましと期待に応えるべく、われわれ日銀マンは次の百年に向けて決意を新たにしているところです。

その第二世紀を担うべく、本年四三名の大卒俊秀が入ってきました。東北大学部からは丹治君を迎えました。四月一日はこうした新人の入行を祝い、日銀の食堂はエビフライや野菜サラダが付いた赤飯をサービスします。恒例のことではありますが、何年経ってもこの日は楽しみです。やはり新入行者が持ち込んでくる清新な潑刺さが、われわれ古手に忘れかけている青年の日の志を思い出させてくれるからでしょう。しかし、社会人生活のスタートには、希望と裏腹に不安も募ります。小生の場

合ですと、法律を少々かじった程度で経済学とは全く無縁の学生々活を送りましたので、果して金融政策などといった仕事ができるのか、と。入行早々の同僚や先輩との議論でも、法律的な発想で「金融政策の責任論」をぶちあげ、皆を困らせたように記憶します。

一年経ち、二年経つうちに、大学四年間で学んだことは大したものでないことに気付いてきました。というのは、日々の仕事の蓄積を通じて経済学専攻組との遅れを徐々に取戻すことができたからです。半面で法律の知識も薄れていったわけですが、いままって日常の仕事に役立っているのは法律的な物の考え方のように思えます。青春の一時期、一つの学問に集中的に打ち込むことの何と素晴らしいことか。

学生時代を総りあるものにするのが友人であるように、社会人生活でも心置きなく話し合える友人が欠かせません。小生にとって、日銀のわが大学出身者による親睦会「青葉会」の面々もそのような存在です。現在、現役三四名、OB二四名の大所帯となっております。春秋の定期的な会合のほか、

メンバーの転勤などの機会を利用して酒杯を交わしながら親睦を深めています。これまで伸び伸びと銀行生活を送ってきたのも、こうした会などを通じての諸先輩の温い励ましなどがあったればこそと感謝しています。職場の上司でもあった井倉さん(昭19年卒、滋賀銀行頭取)や垂井さん(昭23年卒、日本警備保障社長)などには、いまだに人生の指針などを仰いでいる次第です。先輩、後輩の関係は、時に煙たく、時にやっかいなお荷物存在ですが、そのように感ずるのもお互いに大きな影響を及ぼし合っているからなのでしょう。

仙台を去って二〇年経つたいま、先輩が小生にそうであったように、わが先輩に存在感あふれる先輩となるにはどうすればよいかを真剣に模索しています。

(昭和三十八年卒 日本銀行営業局証券課長)

### 宮城県庁職員

#### 同窓生

向山 興

宮城県職員(事務職員)で本学部出身者は現在五十七名おります。上は昭和二十八年卒から、昭和五十八年卒まで、奇しくも、丁度三十年の隔たりとなっております。その構成は、昭和三十九年卒までが十八名(三十一・六%)、昭

和四十年台卒が十三名(二十二・八%)、昭和五十年台卒が二十六名(四十五・六%)となっております。三十才台以下の若い層が過半を占めており、最近では毎年度四、六名の新人増加ということと、頼もしい傾向だと思えます。

従来、積極的に同窓が合寄って「会」をつくらうという気風はあまりなかったのか、懇親会等も催されませんでした。私の記憶では、昭和三十年台に、法・経・文各学部卒業者が、時々、懇談会等を催されていたようで、旧制の大先輩が主体の集まりで、晩成会という名称がついていたと思います。

現役の五十七名のうち、五十六名が新制度で地方公務員法による試験制度で採用されておりますので、その意味では新しい集団といえるかもしれません。今後、この集団をまとめて、同窓会として皆様が仲間入りしなければなりません。幸いにも、昨年、宮城支部長になられた津軽副知事のお声掛けもあり、十一月十九日の支部総会後に、ささやかな懇談会が開催されました。三十人を超える出席者を得て盛会裡に終わりました。特に、昭和五十年台卒の若い人達が約半数を占め、私などは、「同窓会シッカリシロ」とばかり発破をかけられる始末でした。そこで、改めて組織的なまとまりが必要だと感じました。今年度にはいり、新人(六名)を加えた名簿(メモ)ができましたので、これから、世

話人(幹事)を選び出して、「会」をつくる準備を始めよう……というところですが、つくる以上は、年一回の懇親会だけではなく……と考えるとおりませんが……とにかく、若い人達を中心に、話合いの場をつくり、「会」の名称をはじめ組織・運営等々について詰めて行きたいと思っております。

私共としては、宮城支部長の膝元にありながら、同窓会としてのまとまった活動等もないまま、心苦しく思っている次第です。会報を通じて、皆様方の各職場での同窓会活動を拝見しておりますが、ご意見、ご助言等をお寄せいただければ……と考えております。

昨今、本県のみならず地方自治体全般に、行政改革とか財政再建といった難問を抱えておりますが、知恵と努力を結集して、これを克服し、多様な行政需要に対応しながら新しい地域社会をつくっていくなければと、決意を新たにしています。私共、それぞれの持ち場で、頑張っております。同窓会組織もやがて整って参るかと思っております。

(昭和二十九年卒 県地労委事務局長)

《原稿募集》  
会報十一号掲載の原稿を募集しておりますので、同期会や支部会の会合の際は是非原稿をお送り下さい。

# 同窓会総会報告

佐々木 尚介

昭和五十七年度の同窓会総会は東京支部の御好意により、東京支部会と合同のちかちで、昨年十二月一日(木)午後六時から、東京の新橋第一ホテル宴会場で開催されました。林屋教授の司会で恒例により廣中俊雄会長を議長に選出、昭和五十六年度収支決算と役員改選の件がいずれも承認されました。続いて事務局から運営委員会の設置について、五十七年九月四日の理事会で承認されたことが報告されました。委員会は会長を委員長として、ほかに常任理事(在京一名、在仙二名)、事務局長、事務局次長など理事若干名で構成し、事務局の諮問に応じ同窓会運営を円滑化する目的で設けられたものであります。次に元同窓会長外尾教授から法学部学術振興基金のその後の経過と使途の概要についての説明を混じえて会員一同に対する謝辞が

東京支部会と合同の懇親会風景



述べられ、議事は終了しました。当日は大変な盛会で二百名以上の同窓生が出席されましたが、母校からは同窓会長廣中教授、元会長外尾教授、小嶋教授、藤田教授

が、更に同窓生で母校教官の阿部・林屋・小山の各教授が出席され、今までにない盛大な総会にすることが出来たことに厚く御礼を申し上げます。引き続き東京支部総会と懇親会が行われましたが、何んといっても本同窓会設立以来副会長として本会の為に御尽力を賜った、昭和三年卒業の安西浩先輩が財界人として最高の勲一等旭日大綬章を受けられ、当日の席上、勲記と勲章を御披露されたことで最高の盛り上りを見せました。私は同窓生の一員として先輩の叙勲に対し心からお祝いを申し上げる次第であります。終りにこのような盛大な総会を開催することが出来たのは、東京支部会あげての御援助の賜物と厚く感謝申し上げます。

(同窓会事務局長)

## 支部だより

### 東京支部会

小幡 常夫

東京の桜の季節は不順な天候でしたが、爽やかな若葉、麗かな陽光を見る昨今です。全国同窓生各位には益々清栄のこととお慶び申し上げます。さて当支部会の五十七年度総会は去る十二月一日新橋第一ホテルで開催されました。当年は本部と合同で挙行されまし

勲一等旭日大綬章を受章した 安西 浩氏



た為恒例の記念講演会は割愛されました。本部総会終了後、安藤理事の司会のもと、石田副会長の開会の辞で始まり、報告・議事は文字通り一渦千里で行われました。と申しますのは、当日は経済活動諸団体主催で財界人叙勲祝賀の式典が行われましたが、安西支部会長は、この式典から正装のまま総会に駆け付けられました。総会は正に叙勲祝賀会と化した次第です。石田副会長から簡単に叙勲内容のご紹介があり、やがて安西会長は壇上に立たれましたが、民間最高勲章といわれる勲一等旭日大綬章は流石に燦たるもので一同目を見張りました。

そして安西会長の軽妙なご挨拶振りには場内はドーンと湧きましました。その後本番の第三部懇親会の中に、第一回卒業生の小幡大先輩の音頭で乾杯をして会食が始まりました。第一ホテルご自慢の豪華な料理、特設出店の焼鳥やそばに舌鼓。さらに安西会長ご寄附のパンケットガールの艶かなサービスマン。宴も酣の頃、思いも掛けぬチャンスには是非最高勲章を拝見とばかり、大勢の人が次々と会長の椅子に駆け寄り、手に触れんばかりの熱視、カメラの閃光。これらに対応される安西会長は終始微笑を以って披露されておりました。また会場のあちこちでは、久方振りにわざわざ上京された諸先生方を囲み、それぞれのクラスの面々が懐しげに語り合う風景も見られ、本当に懇親の意が尽きられている観がありました。名残は尽きず、途中で帰る会員も少なく、いつまでも宴を続けたいところでしたが、予定の時刻も迫りましたので、杉副会長が万才三唱の音頭をとり、同時に閉会の辞となった次第です。(東京支部会事務局長)

## 青森支部

青森支部事務局

春の津軽路は、桜とりんごの花に覆われる。とりわけ、弘前城址の桜はすばらしい。作家太宰治をして、十二単衣をまとった透き通るような美女と言わしめた残雪の岩木山を眺め桜の下で交す杯は格別の風情である。

今年の弘前桜まつりの庄巻は、りんご娘のデイスコダンスであった。三十年程前は、可憐なりんご娘であったであろう方々が、豆紋りの頬被と緋の着物をまとい、津軽三味線にのり、デイスコダンスを舞う様は、周囲の興を誘った。一方、県南八戸では、燕島に数



千羽のウミネコが飛来、繁殖期にある。北国の厳しい自然環境の中にあつて、卵からかえつたばかりの雛鳥が、羽ばたき、飛び立とうとする姿は感動さえ覚える。

さて、当支部同窓会は、五十三年開催以来、活動を控えてきたが、各職場ごと同窓会は活発に行われており、竹中支部長を中心とする同窓生諸氏の結束は固いものがある。

尚、一昨年の夏、東京大学へ転任されました比較外国憲法の樋口陽一教授が来青、浴衣姿でネブタ祭に参加、青森の夏を大いに楽しまれたことを報告します。

### 東海支部

中山 信義

一、今年も、恒例の東海支部総会が、四月八日午後六時から名古屋屋敷の鳥久にて開催された。高橋幹事長（昭和一七年卒）の挨拶及び会計担当から経理報告があつた後、菅谷大先輩（昭和三年卒）による乾杯の音頭により懇親会へ移つた。そして、参加者三二名は、八卓のテーブルに分かれ、鳥久自慢の鳥料理に舌鼓を打ち、途中、写真撮影をばさんで盛會裡に午後九時、中山大先輩（昭和九年卒）の音頭による万歳三唱をもつて閉会となつた。

二、総会では、毎年出席される方々の他、偶々転勤で東海地区へ来られ顔を出された方もかなりお

られたが、初対面、年齢差は、同じ杜の都で学んだということからすぐ打ち解け話もはずみ、各テーブル間の交流も盛んに行なわれた。ただ一つ寂しかった点は、昭和四十年以降の卒業生の参加が少ないことである。二十代、三十代は、

どうしても転勤の機会が多く当地へ来てなじみが薄いこと、また、仕事上も時間的に融通がききにくいこと等も一因かと思われる。

しかし、参加してみると、つぶしのきく法学部のおり会員の職業も多方面にわたり、年齢も異なるので、

普段、仕事上接する機会が少ない分野、地位の方も

聞を広めるには良い場となつてい

また、

総会のあと先輩に連れられて二次会、三次会へ行くこともあり、最近これが楽しみの一つとして総会へ連続して参加している後輩もみられ、

懇親の実を上げている。毎年四月上旬に開催される支部総会へ、より多くの会員が参加されるよう呼びかけた。

三、最後に、愛知、岐阜、三重三県下の同窓生を以て構成する東海支部の会員数は、一七七名（昭和五五年現在）を数える。但し、

転勤等による移動も激しく、また、以降の新卒会員を含め支部の同窓会名簿を新たに再編する時期にかつてい

そのため、本会報を通じて正確な名簿作り及びその発送のために御協力をお願いする次第である。近時、右東海三県に來られた方、左記宛御一報いただければ幸いである。

名古屋市中区丸の内三丁目七番七号 チヤンマンジョン丸の内四〇五号 富島法律事務所内  
中山 信義  
(昭和五三年卒会計担当)

### 宮城支部

東海林恒英

昭和五十三年十月に発足した法学部同窓会宮城支部も四周年を迎えたが、今回は同窓会本部総会が東京で開催される年であることから、宮城支部が仙台で単独で開くこととなつた。

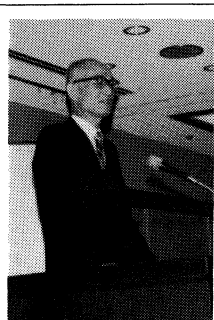
例年出席する顔ぶれが固定化し、東京に次ぐ多数の会員を擁する支部としては変化に乏しいうらみがあることから、魅力のある支部総

会にするため準備を進めて来た。十一月十九日、仙台市内のホテルリッチ仙台で開催された総会は、これ迄にない八十名を越える盛會となり、佐藤左織支部長の挨拶に引き続いて、昭和五十七年四月より就任された同窓会長広中俊雄法学部長の祝辞があつた。

議事は二年任期の役員改選であつたが、発足以来四周年支部長を引き受けられた佐藤支部長の強い辞意で、副支部長の津野芳三郎宮城県副知事（昭和二十二年卒）が選ばれ、副支部長には明間輝行（昭和二十六年卒、東北電力）、小畑清（昭和二十八年卒、七十七銀行）の両氏がそれぞれ満場一致で選出された。

続いて、今回初めての企画として、同窓会員による講話が行われたが、第一回目の講師は四月に赴任された東北管区警察局長の近藤一郎氏（昭和二十八年卒）で、「最近の東北の警察」と題するお話をいただいた。大学卒業以来初めて赴任した仙台の変貌にはじまり、欧米先進諸国と比較して優秀さにおいて格段の差がある日本の治安

宮城支部総会で挨拶する  
広中同窓会長



がいかに保持されているのか、また東北における市民一人当りの警官の数など具体的な数字を挙げて、講話は短時間ながら有意義なものであった。

引き続き行われた懇親会は、宮城支部発足以来その運営に尽力された高杉能行前副支部長の乾杯で始まり、高柳真三名誉教授のいっも変らぬお元氣なお話、昭和五十七年三月新卒の新入会員の紹介のほか、諸先輩による近況の報告など、なごやかな中にも、かつてない盛り上りを見せた。

(宮城支部事務局長)

盛況だった宮城支部総会



## 同期会報告

### 卒業後四半世紀

山脇 晃

(昭和三十三年卒同期会)

昨年八月最後の土曜日、昭和二十八年入学、三十二年卒業同期会が、仙台近郊秋保温泉で開催された。

これ迄も五年きざみに開催し、昭和一ケタ最年少の誇りと団結を保ってきた我が同期会であるが、卒業後既に四半世紀、この記念すべき会に一人でも多くの参加を呼びかけようと在仙幹事によって計画がたてられた。三月には予告の通知を送る一方、諸先生には当日のご案内とともに、記念の色紙揮毫をお願いするなど努力の甲斐あって、家族同伴を含め五十人を越す出席申し込みがあり、幹事も大いに張り切った。

またやむを得ず欠席する旨の返信も全国各地ばかりか海外からの混じり、経済大國日本を支える世代としての同期生の活躍ぶりをしのばせた。

同期会当日は快晴、残暑



高柳・世良両先生を囲んでの会員・家族記念写真

員期待の中で抽選が行われたが、懐かしい思い出につながる恩師の力作だけに、当った同期生の喜びも一入のものであった。更に女性参加者には宮城野萩で作った色紙かけが記念品として贈られるなど幹事の趣向に会場の雰囲気は大いに盛り上がった。

会場での話題も年相応に子供の進学や就職の話に花が咲き、宴会が終ったあとも、二次会用にとった幹事室に全員が繰りこみ、深夜まで名残りつきない話が続いた。

幸いなことに前回の同期会以来全員恙なかったが、翌日は熱い日射しの中をさらに次回三十周年の再会を約して三々伍々帰途だったのであった。

### 事務局よりお願い

(1) 名簿資料は七月末日迄

今回会報とともに「五十八年度会員名簿作成資料」とするため私製葉書一葉同封しました。名簿はこの資料をもとに作成致しますので全員もれなく御記入のうえ御返送下さい。料金は受取入払ですから切手を貼らずに七月末日迄に御

投函下さい。これ以後投函の分は訂正されない場合がありますので御注意下さい。

(2) 会費はいますぐ送金を

本年は会員名簿の発行を予定して居ります。近年諸物価高騰により名簿発行費用はますます増大して居ります。昭和五十六年度名簿の原価のうち直接費のみで千二百円を越して居ります。このため会費の滞納がありますと資金的にパンクしてしまいます。

事務局としてはまことに己むを得ないことではありますが、滞納の方には名簿発送停止することになりますので、この機会には是非御送金下さい。「そのうちに送金しよう」が失念の原因となります。急ぎ今すぐ御手配下さい。

(3) 本部会計と支部会計

同窓会費の払込の際、同窓会本部と各地支部(例えば東京支部会など)の会費を混同している方があります。

同窓会本部の口座は左記のようになつて居りますので、振込用紙をご確認のうえ、くれぐれもお間違いのないようお願い申し上げます。

振替口座番号

仙台七二九九

七十七銀行本店

〇一一一一八

第一勧銀仙台支店

一三三七八五

三和銀行仙台支店

〇五一五四二